大正國語讀本

修正版

卷四

375.9
H019
資料室

42016
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
2240

資料室
3959
H019

大正七年十二月二十壹日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

係科孝一編 修正版

大正國語讀本

東京 合資會社育英書院發兌

廣島大学 教 38327

大正國語讀本（修正版）卷四

目次

一 我が國民の武勇……芳賀矢一……一
二 死して惜しまるゝ人たれ……嘉納治五郎……八
三 城山の曲（韻文）……勝海舟……一六
四 西郷南洲遺訓……西郷隆盛……一九
五 俳句評釋……正岡子規……二三
六 秋の夜……幸田露伴……二九
七 アルプ越その一……（内外歴史講壇）……三二
八 アルプ越その二……三八

九　戰場が原……（日本名勝寫生紀行）…四四
一〇　レマンの湖……鹿子木員信…五〇
一一　我が家の富……德富健次郎…五七
一二　大石良雄……福本日南…六一
一三　歳の暮……三宅雪嶺…六八
一四　薩摩守仲俊古狸を捕ふる事……（古今著聞集）…七一
一五　狂歌（韻文）……七五
一六　小蛇の疵……新井白石…七九
一七　近江聖人の幼時……村井弦齋…八三
一八　浦鹽より（候文）……太田覺眠…九五
一九　佛國の志士ガンベッタ……（通俗世界全史）…九九

二〇　佛國の志士ガンベッタ……一〇四
二一　乃木將軍（韻文）……森鷗外…一一〇
二二　君府に於ける古今興亡の感……（頰杖つきて）…一一六
二三　岩倉右府その一……井上毅…一二三
二四　岩倉右府その二……一二八
二五　岩倉右府その三……一三三
二六　公子の躾方を申し遣す（候文）……德川齊昭…一四〇
二七　幕末論その一……福地源一郎…一四三
二八　幕末論その二……一四八

廣島大學圖書之印

大正國語讀本（修正版）卷四

一　我が國民の武勇

芳賀　矢一

我が國民の武勇は、日清・日露戰役の現代まで、日本人は常に勇敢を以て稱せられて居る。

武甕槌神又建御雷神に作る。常陸の鹿島神宮に祭らる。

日本武尊景行天皇の皇子。

槌や桙で叩きあつた時代から、地に十握劍を植ゑて、其の鋒先の上に足座をかいたといふ武甕槌神、髮を解いて童女姿になり、單身賊魁を刺したといふ日本武尊、これらの武勇譚は後世の武士の物語と何等の差別は無い。この武勇の精神

が、天孫の降臨ともなり、中國の平定ともなつたので、是が後世の武士に傳はり、現代の軍隊にも活きて居る。祖先の血は代々子孫に流れて、同じ樣な武勇談が、時と處と人とを換へて繰返されるのである。

日本武尊の熊襲征伐は、卽ち賴光*の酒呑童子退治で、昔の膳巴*提便の虎退治も、後世の加藤清正の虎退治と同樣の話である。「新羅王我が臀を啗へ。」と叫んだ調伊企儺*の生れ代りは、「援軍來りぬ。主公御心を安んぜられよ。」と呼ばはつた鳥居*強右衞門勝商である。「面には矢は負ふとも背には立てじ。」といふ勇敢な氣

賴光　源滿仲の子、圓融・花山・一條・三條・後一條に仕へし人。

膳巴提便　欽明天皇の御代の人。百濟を救ふ。

調伊企儺　欽明天皇の御代の人。

鳥居强右衞門勝商　奧平信昌の家臣。

象は、後世にうしろ傷を恥辱とする精神に外ならぬ。

生年十六歲の鎌*倉權五郎景政は、左の眼を鳥*海彌三郎に射られ其の矢を拔く間もなく、直ちに彌三郎を追つかけて、討取つたのである。義經は、「後足をふみ、命を惜しと思はん人々は、これよりかへり下り給へ。打ちつれては重々源氏の名折なり。」と言つた。「後足をふむ。」「敵に後を見せる。」といふことは、武士の最大恥辱である。是が日露戰役に露軍をして戰慄せしめた日本軍突貫の原動力である。

この上下三千載を通じた、けなげな武勇の精神が、卽

鎌倉權五郎景政　八幡太郎義家の臣。

鳥海彌三郎　清原武衡の臣、堀河天皇の時代の人。

ち我が民族の強みであつて、石や木でたゝき合つた時代から、刀劍・弓矢の世になつても、今日のやうな砲丸や水雷の時代になつても、脇目もふらず進んで退くことを知らぬといふ精神は變らぬのである。進むか死ぬか、二つに一つであるのである。この強い個人から成立つた軍隊の強いことはいふまでも無い。つまり古い日本が新しい兵式で訓練せられたからである。新しい訓練があつても、古い精神が缺如しては、何の役にも立たぬことは、支那の軍隊や土耳古の軍隊を見れば、明白であるではないか。

日本軍隊の強いといふことは、第一に日清戰爭、第二に北清事件、第三に日露戰役と、段々歐米人の間に知られて來た。早く日本に來て居つた外人の中などには、とくに之を知つて居つたものも、幾人かはあつたらうが、弘く我が軍の武勇を世界に示したのは、右の三大事件の結果である。そこで世界の人は一同驚歎の目を見はつて日本をながめた。さて其の強兵の理由は何であらうと、種々研究を始めた。日露開戰當時には、日本人は米食するから強いとか、跣足で居るから強いとか、色々淺薄な結論も出たやうで

あつたが、遂には日本の歴史に着眼して、歴史上から解釋を求めようとするに至つた。

是は當然の事で、これまでは歐米人は自己ばかり知つて居つて、他人を知らなかつたのである。露西亞なども日本を知らないで日本と開戰したのである。それ故孫*子の言ふ通り連戰連敗したのである。さて日本の歴史を研究してゐる中、彼等は我が國の武士道に着眼した。日本の武士道的教育が卽ち強兵の原因であると認めて、之を研究する事が有識者の間に起つた。日本の擊劍術に感心したり、柔道を學

孫子　支那齊の兵法家。

んだり、さてはわざ〳〵鹿兒島の研究に出掛けたりしたのは、皆其の爲であつた。日本人の間にも盛に武士道を說いて、戰捷の原因はこゝに在りと宣言し、現今の德育の不足勝の方面を補はうとする學者・教育家も尠くはない。けれども、國民精神は古來一貫したもので、決して武士道で始つたものでは無い、武士時代に出來上つたものでは無い。西洋人の中でも、武士道以外に着目して、教育勅語の講釋を聞きたがるものも出來た。菊地男爵はそれを講釋するために英國へも出向はれた。我が國の君臣關係とい

ふ、この特殊な關係が段々分るやうになつて、神道といふものが不思議なものと思はれるやうになつたのは、最も新しいことであらう。英人の中にも、獨人の中にも、今は日本の神道の研究が最も注意せられて居るやうである。即ち建國の昔に遡らなければ、日本の軍隊の強いといふことは眞に了解せられないのである。（戰爭と國民性）

二　死して惜しまるゝ人たれ

嘉納　治五郎

生れて長じ、長じて死す。禽獸かくの如く、植物かくの如く、人間亦かくの如し。されば、人として禽獸・植物と異ならんと欲せば、生れて生れがひある人たらんことを要す。予は更に前途有爲の諸子に向つて、死して擧國の悼惜を受くる人たらんことを望む。

人生れて呱々の聲を發するより、長じて一個の成人となり、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩德一ならず。之を近くしてまづ父母の洪恩あり。我等の生るゝや、自營の道を知らず、自活の道を知らず、唯泣くことを知り、笑ふことを知るの

み。此の閑晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦、以て我等を保育し、以て我が生長を遂げしむるものは、豈我等の父母にあらずや。

之に次ぐに師長の恩あり。我等が僅かに黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至るまで、我に誨ふるに事理を以てし、我に說くに道德を以てし、必要なる學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我をして將來世間に獨立する基礎を成さしむるものは我が師長にあらずや。

更に又至尊及び國家に對する恩あり。至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる御靈德を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は生民の安寧を維持し、其の福祉を增進し、兇惡を正し、不逞を罰し、以て我が父母・師長をして我等に對する慈愛・薰陶の務を完うせしめ、又我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむ。若し國家にして其の務を爲さずんば、生民、亂離・塗炭の苦に陷りて、我等は遂に安全なる發育を遂ぐるに由なけん。我等の安全なる發育を遂げて一個の成人となるは、實に是等數者の恩あるに由る。然らば則ち我等が成人

の後に於て是等數者に酬ゆるは、人間當然の義務に非ずや。

然れども、人間の生涯は實に區々たり。或は其の修養の時期に當りて、懶惰・遊蕩の間に貴重の光陰をおくり、體軀徒に長じて、當に自營・自活、以て我が生育の恩に報ゆべき時に至るも、無爲・無能、其の父母の恩に報ゆること能はず、其の師長の恩に酬ゆること能はざる者あり、況や國家が生を成す所以に對ふる事をや。朝に起きて食ひ、夕に食うて睡る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。これ所謂醉生

夢死する者にして、實に國家の蠹賊、人間の最下なる者なり。

又其の無能かくまで甚だしきに至らず、何等か一種の事に從ひ、國家に對して多少の裨益を爲し、以て自活の道を求め、僅かに父母を養ひ、自ら衣食して一生を送る者は、之を前の醉生夢死する者に比すれば、優る事萬々なりと雖も、かくの如きは僅かに自ら受くる所の恩に酬ゆるに過ぎずして、其の一生の經營・事業の永く後世に德し、其の流風・遺韵の遠く子孫を動かすに足るものなし。かくの如きは、當に我等の理

想とすべき進境に非ず。我等は人間天賦の能力を善養し、利用し、其の畢生の事業は以て我等が父母・師長・國家・社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の綽々たる者あり、後世子孫をして永く其の餘澤を受けしめ、我等を得て國家が一段の進歩を爲したることを長へに追憶せしめんことを期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは、實に此に外ならず。

それ生きて一鄕の爲に功ある者は、死して一鄕の爲に惜しまれ、一郡の爲に盡せる者は、一郡の爲に悲しまる。若しそれ其の事業、國家全體の進歩を助成し、其の忠誠、能く闔國民に認めらるゝ者に至りては、其の取る所の何の道たるを問はず、其の人の存否は直接・間接に國家の進運に關すること甚だ大なるものあり。是を以て其の人一たび逝くや、國を擧つて之を惜しまざるはなし。嗚呼、天下の廣き、逝く者は日夜に是あり。而して其の死の天下に知らるゝ者幾何ぞ。一たび死して國を擧げて之を悼惜す。豈丈夫の本懷にあらずや。

少壯の諸子よ、諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと

雖も、一生の覺悟は卽ち今日より定め置かざるべからず。知らず有望の諸子は死して人に省みられざる人たらんと欲するか。一鄕・一郡の爲に惜しまる人たらんと欲するか。抑〻亦擧國の悼惜を受くる士たらんと欲するか。（國士）

勝舟

三　城山の曲

城山　鶴丸山の俗稱、鹿兒島城あるがゆゑにこの名あり。

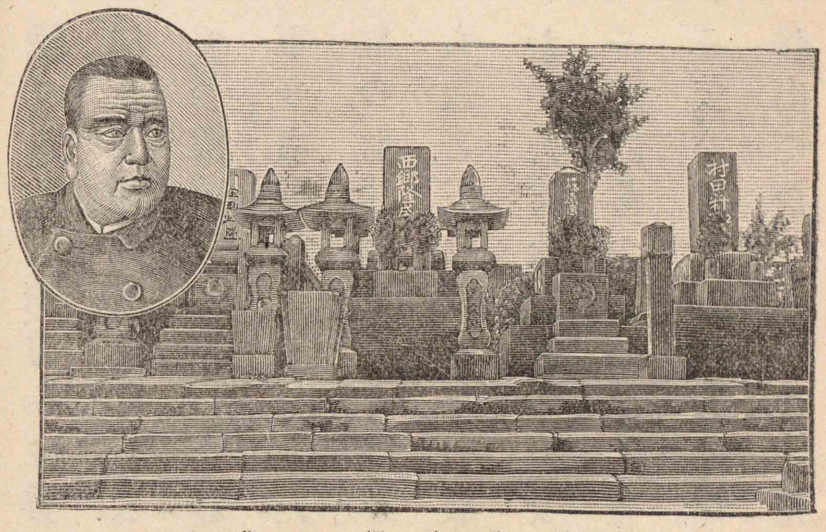
拔山蓋世　項羽の詩に「力拔レ山兮氣蓋レ世」と在り。

それ達人は大觀す。拔山・蓋世の勇あるも、榮枯は夢か幻か。大隅山の狩くらに、眞如の月の影淸く、無念・無想を觀ずらむ。何を怒るか、いかり猪の、にはかに激する數千騎、勇みに勇むはやりをの、騎虎の勢一徹に、止り難きぞ是非もなき。ただ身一つをうち捨てて、若殿ばらに報いなむ。明治十年の秋の末、諸手の軍うち敗れ、うちつうたれつやがて散る、霜の紅葉の紅の、血汐に染めど顧みぬ、薩摩武夫のをたけびに、うち散る玉は板屋打つ、霰たばしる如くにて、面を向けむかたぞなき。木だまに響く鬨の聲、百のいかづち一時に、落つるが如き有樣を、隆盛うち見てほくそ笑み、「あな勇ましの人々や、いざもろともに塵の世を、脫れ出でむはこの時」と、ただ一言をなごりにて、桐野・村

桐野　名は利秋。

村田
名は新八。

岩崎
鶴丸山の背後なる岩崎谷。



西郷南洲の墓

田を始とし、宗徒の輩もろともに、煙と消えし益荒男の、心のうちこそ勇ましけれ。官軍これを望み見て、昨日は陸軍大將と仰がれて、君の寵遇世のおぼえ、たぐひなかりし英雄も、今はあへなく岩崎の、山下つゆと消えはてゝ、移れば變る世の中の、無常を深く感じ

つゝ、唯悄然と隊伍を整へ、目と目を見合す許りなり。折しもあれや、吹きおろす、城山松の夕嵐、巖間にむせぶ谷川の、非情の聲も何となく、悲鳴するかと聞きなされ、戎衣の袖をぬらすらむ。（海舟言行錄）

四　西郷南洲遺訓

事大小となく、正道を履み至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦その差支を通せば、後は事宜次第工夫の出來るやうに思へども、策略の煩ひ屹度生じ、事

必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる樣なれども、先に行けば成功は早き者なり。身を修むるに克己を以て終始せよ。總じて人は己に克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るゝものぞ。よく古今の人物を見よ。事業を創起する人、大抵十に七八までは能く成し得れども、殘り二つの終まで成し得る人は稀なり。始はよく己を慎み事をも敬する故、功も立ち名も顯るゝなり。功立ち名顯るゝに隨ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼・戒慎の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、その成し得たる事業を

負み、終に敗るゝものにて皆自ら招くなり。故に己に克ちて睹ず聞かざる所に戒慎すべきものなり。人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。過を改むるに、自ら過てりとだに思ひつかば、それにて善し。その事をば棄てゝ顧みず、直ちに一歩踏出すべし。過を悔しく思ひ、取繕はんとて心配するは、譬へば茶碗をわり、その缺を集めて合せ見るが如く、詮もなきことなり。

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末

に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大事は成し得られぬなり。

道を行ふ者は天下擧つて毀るも足らずとせず、天下擧つて譽むるも足れりとせず、自ら信ずること厚きが故なり。

天下後世までも、信仰悅服せらるゝものは唯これ一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人、その數擧げて數へ難きが中に、獨り曾我兄弟のみ今に至りて兒童・婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤きが故なり。誠ならずして譽めらるゝは

曾我兄弟　兄は十郎祐成、弟は五郎時致。後鳥羽天皇の御代の人。

僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。

今の人、才識あれば事業は心次第に成さるゝものと思へども、才に任せて爲す事は、危くして見て居られぬものぞ。體ありてこそ用は行はるゝなれ。

五　俳句評釋

正岡子規

俳句の妙味は終に說明すべからず。されど字句の解釋はさまで難きにあらず。今初學のために二三の古句を解說し、併せて多少の批評をなすべし。

去來　姓は向井、芭蕉の高弟。

嵐雪　姓は服部、芭蕉の高弟。

何事ぞ花見る人の長刀　去來

長刀をさしたる人の、花見に出かけたるを咎めたるなり。花見とならば、いかめしき長刀をさして、羣集の中へ出づるにも及ぶまじきに、その無風流は何事ぞと嘲りたるなり。これらは多少の理窟を含みをる故に、俗閒に傳はり稱せらるれども、名句といふは必ずしもこの種の句に限らざるなり。

蒲團着て寢たる姿や東山　嵐雪

是は、實景を知らぬ人にはその味を解し難し。試みに京都に行きて、つくづくと東山を見るべし。低き山の近くに在りて、しかも頂の少しづゝ高低ある處、恰も人が蒲團を被りて寢たるに似たり。さればこそこの譬喩的の吟ありたるなれ。品のよき句にはあらねど、滑稽と輕妙とを以て勝りたるものにて、容易に摸倣し得べからず。又この句につきては、多くの人の氣づかざる特色あり、そは冬の季といふことなり。さすがの都も冬枯れて、見るものとして淋しく寒からぬはなきが中に、かの東山を見れば、これも春頃のなまめきたる樣を失ひて、唯ひつそりと寒さうに横たはる處、蒲團うち被りて寢たると見れば、淋

しさの中に多少のをかしみもありて、何となく面白う感ぜらるゝなり。

我が雪とおもへば輕し傘の上　其角

普通には「我がものとおもへば輕し傘の雪。」として傳はれり。　されど、「我がもの。」としては甚だ俗なり。「我が雪」の方に從ふべし。　意味は解釋するまでもなし。この句、斬新を以て賞すべし。　若しこれを摸倣する者あらば、直ちに邪路に陷ること必定なり。

わが事と泥鰌の逃げし根芹かな　丈艸

芹は春のはじめのものなり。　芹摘にと手を出したれば、芹のあたりに居たる泥鰌の、捕へられんとや恐れけん、あちらに逃げ隠れたりといふ意にて、泥鰌を擬人にして輕くおどけたる處、丈艸の壇場なり。

世の中は三日見ぬ間に櫻かな　蓼太

名高き句にて、世の人大方は知れり。　誰にも分る句にして、しかも理窟を含みたれば、世人には賞翫せらる。　されど理窟を含みたるもの必ずしも善くは非ず。　この句、格調頗る下品なり。　俗には「三日見ぬ間の」と傳へたれども、やはり「見ぬ間に」の方宜し。「の」とすれば、全く譬喩となりて味少く、「に」とすれば、「櫻」が主

其角　姓は榎本、芭蕉の高弟。

丈艸　姓は内藤、芭蕉の高弟。

蓼太　姓は大島、嵐雪の孫弟子。

となりて實景となる故に、多少の趣を生ずべし。

菊の香や奈良には古き佛たち　芭蕉

この句に於て、菊と佛とは場所の關係なし。必ずしも佛の前に菊を供へたるにもあらず、必ずしも佛堂の傍に菊の咲きたるにもあらず、强ひて場所の關係をいはゞ、菊も古佛も共に奈良にあるまでの事なり。作者の奈良に遊びし時、恰も菊の咲く頃なりしなるべく、從つてこの句を以て奈良をあらはしたるなるべしと雖も、菊花と古佛との取合せは、共にさび盡したる處、少しも動かぬやうに見ゆ。こゝ作者の活眼

芭蕉　姓は松尾、元祿時代俳諧の巨匠。

といふべし。

時鳥鳴くや雲雀の十文字　去來

時鳥は夏にして、雲雀は春なり。時鳥は春に鳴かざれども雲雀は夏も居るゆゑ、この句は夏季となるなり。時鳥は横一文字に飛ぶものにして、雲雀は下より上へ眞直に上るものなり。故に、丁度、雲雀の上る處を時鳥が横ぎりて、恰も十文字の如くなりたるをいへり。最も巧なる句なり。（俳諧大要）

六　秋の夜

幸田露伴

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光は幼き童の髪のごとし。めでたき事は誠にめでたし。なつかしきことも誠になつかし。されど、猶いさゝか物足らぬ心地す。冬の月は水晶もて作れるものを見るが如し。清さは餘りありて、味無きに近し。夏の夜の月の團々と大いなるが、海原の果より、松の樹の間より、又は市中の甍の浪間より出でたる、目ざましく、心ゆくものにて、夜の景色も快くをかしけれど、たゞ我が魂の世に浮かるゝをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の身に浸み入るやうなるを覺ゆることなし。

秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。中の秋の五日・六日の月の、ふと見る夕暮の空に出て居りて、雜木の梢、もろこしの垂葉などに風かすけく呼く、まづおもしろし。遠山黑く暮れて、素月、輝を揚げ、庭樹のそれぞれ潤葉・纖葉の葉表の照、葉蔭の闇、おのがじし畫趣を爲し、詩情を作りて、合して爽凉・清澄の景を釀し出すさま、いづくにも有りふれたることながら好し。夜更け、蟲吟じて、世の中靜かなる時、たまく燈前に書をさし置きて、起つて廊を歩むをりから、窓の白きを看て戸をおし開きて出づれば、月天心を過ぎて、光

華六合に彌り、霜に澄める夜の氣は水まさに凍らんと欲するが如くなる、身心頓に此の世のものならずなりたるやうに覺えて、秋ならでは、夜ならでは、月ならではと思はる。（洗心錄）

七　アルプ越　その一

Alps

時はこれ西歷紀元前二百十八年、行く春の名殘も惜しき五月の末、鬼將軍の召に應じて集る者は、九萬の歩兵、五十の戰象、重騎・輕騎合せて一萬二千許り、總勢十萬に餘つて根據地なる西班牙の新カルタゴの郊外に雲霞の如く鬨き渡つた。將軍ハンニバル陣頭に立つて命を下せば、一陣二陣繰出だす、春の潮の寄するが如き勢である。

Carthago Nova.　鬼將軍　ハンニバル

エブロー川を打渡り、ピレネー山を踏破り、更に又ローン河の象渡しに幾多の艱難・辛苦を嘗めて、十月の半ば、山地に十分の秋闌けて、天に木枯の吹きすさぶ時、ハンニバルの軍勢はアルプ山に面して立つた。

Ebro
Pyrenees
Rhone
Hannibal

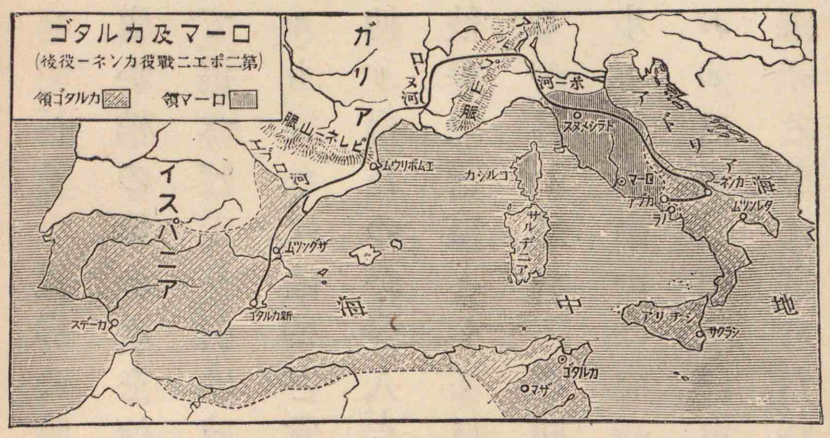
仰げば絶頂は雲に隱れて、飛ぶ鳥の影さへ見えず、俯せば草木霜に枯れて、千里蕭條の裾野が原。見渡せば嗚呼見渡せば幾百里、自然が築ける萬里の長城、蜿

蜒として南北の世界を限る。

鳥も翔らず鹿も渡らぬ此の天險、人馬・兵糧幾萬を擁して越えんとするハンニバルは、抑〻人かはた神か、否否彼こそは羅馬を憎む一念に命を忘れた阿修羅であらう。

阿修羅　印度神話中に在る魔神にして、常に三十三天の善神と戰ふ。

道に半ばを失つて、總勢今は五萬許り、吹きおろすアルプの山の山風に、征旗堂々と押立てゝ、此の天險を登つて行く、その意氣込は天地を呑まんばかりである。或は槍を杖ついて岩角を攀ぢ、或は木の根に縋つて崖を登る。一歩登れば一歩は更に危く、一崖攀



づれば一崖は更に嶮しく、山は層一層前途を塞いで、恰も行軍を拒むが如く思はれる。

茲に又一段の困難を持來したのは、山中の野蠻人であつた。

彼等は峽谷・山隈の各部落から雲の如く集つて來て、軍隊の行く手を塞ぎ、左右の峯から巖を轉がし石を投げて行軍の道を遮り、隙に乘じて軍馬・兵糧を掠

めて行く。世界の險山を住居とする蠻人は、嶺の小鹿か梢の猿か、崖を傳ひ巖を攀ぢ、森を貫き藪を潜つて、追へば走り、引けば集る。智謀に長けたハンニバルも、これには殆ど當惑したが、色々手を盡した末に、捜り得たのが蠻人どもの習慣である。

彼等の習慣として日のある間は隨分山中を活動するが、日が暮れると同時に小屋・洞穴の口を閉ぢて、一歩も外へ出かけない。此の事を捜り知つたハンニバルは、晝は山陰に屯して兵を休め、日沒に及んで進軍する事に定めた。

暗澹たるアルプの山の夜道を照すは、木枯に研ぐ星の光、高峰に磨く氷の光、踏む足下の覺束なくて、道はなかなか捗らぬ。兎角する間に朝日は昇る。それを合圖に野蠻人等はまた現れて、山上から轉がし落す大磐石、崖下の軍勢は見る〳〵中に千仞の谷底へ跳落され、切立つた岩石に打碎かれて、谷間の雪は忽ちに紅の血潮に染まり、吹來る風は血煙を含んで腥く、反響は人の叫を返して物凄く聞える。

かやうな中で非常な役に立つたのは象隊であつた。小山の樣な動物が、身體にたぶ〳〵の波を打たせて、

呑氣さうに歩いて來ると、蠻人共は膽を潰して驚いた。此の驚はやがて恐怖と變つた。すべて不思議なものを見て恐を抱くは、無智な者の常である。流石に獰猛な蠻人共も、此の不思議な動物には恐をなして、容易に傍へ寄らなかつたといふ事である。

八　アルプ越　その二

かゝる惡戰苦闘を續けて、險山を奮進する事既に八日、麓に足を入れてから九日目に、全軍は漸く絶頂に達した。歐羅巴の屋根と云はれるアルプの絶巓、氣

Carthago

澄み空晴れて、南歐の平野は遠く開け、世界は全く一變したやうな感じがする。ハンニバルは、敵國を眼下に睨んで全軍を止め、「今や我等は、伊太利の城壁を登り盡せり、否實に羅馬の城壁を登り盡せり。是より後は下り道、見よ、彼處の野に到着せば、三度ときは闘はずして羅馬を奪はん。」將軍の意氣天を衝けば、士卒の意氣も亦天を衝く。アルプ山上カルタゴ*全軍の士氣は、既に伊太利の平野を呑み、全軍の心は既に羅馬の都門に城下の盟をなさしめたやうに勇み立つた。

ハンニバル將軍のアルプス越

是より後は下り道、唯一息と思つた道は、前より一層險しくなつた。しかも二三日打續いた寒氣に、山は一面の氷となつて、硝子を張つた樣な崖路を傳はつて行かねばならぬ。過つて一人滑ると、それに押されて次から次へ人なだれを打つてどつと滑る。無慚にも千丈の谷の底へ、數百人の兵士を一時に葬つて了ふ事が度々

八寒地獄　八樣の寒き地獄。地獄は罪業をなしたる者の死後に苦患を受くる所。

であつた。殊に馬などは滑り落ちると、身體の重みで氷の中へ陷つて、そのまゝ凍え死ぬのである。八寒地獄の有樣も思ひやられて、實に悲慘の極みであつた。

困難に困難を重ねながら漸くに進んで行くと、茲に又意外の大難が控へてゐた。見れば前面一町ばかり崖が崩れて、行くべき道は塞つてゐる。仰げば峻峯雲に入り、俯せば幽谷奈落に達す。嵐に翔る猛鷲の翼は知らず、地を行く人間の足を以ては、通過すべき途がない。斯かる際にも物に動ぜぬ將軍は、直に

全軍を引止めて、其處に露營の陣を張らせ、翌日より
は將軍自ら一隊の兵を指揮して、岩を動かし石を切
り、非常な障碍と戰つて、漸く人馬を通ずるだけの細
道を開き、先づ飢と疲勞とに弱り果てた一群の馬を
麓の牧場へ送つてやつた。
其の後猶三日間工事を續けて、象の通れる樣に此の
道を廣げた。　此の工事のために滯在中、途に迷つた
象や馬が段々集つて來たので、それを併せて隊を整
へ、漸く此の難處をも通り拔けた。
併し困難は此處に盡きたのではなかつた。　或時は

吹雪に閉ぢられて道を失ひ、或時は寒風に曝されて
指を落し、辛うじて麓に近いアオスの村に着いたの
は十月末の事であつた。
アルプにさしかゝつてから今日まで丁度十五日、新
カルタゴを出發してからざつと五箇月、出發當時十
一萬の大軍は今數ふれば二萬六千、しかも其の生き
殘つた者共は、何れも肉落ち骨現れて、恰も餓鬼の如
き有樣である。　餓鬼よ餓鬼、誠に是こそは羅馬の血
に飢ゑたカルタゴの餓鬼、今此の餓鬼が突如として、
アルプの險を踏破り、北伊太利に暴れ出たのだ、羅馬

の運命も亦危いといはなければならぬ。

（内外歴史講壇による）

九　戰場が原

戰場が原　下野國日光山中に在り。千町原・赤沼原又はお花畑ともいふ。

蟲鳴かず禽歌はず、白雲悠々として動く日光戰場が原の荒涼たる畫趣は、我等一行が夢に現にあこがれしものにして、如何にして其の廣漠たる枯野が原を描かんかと、幾度か相語り幾度か考へしところなりしが、今朝起きいでゝ今日描くべき戰場が原の光景を思ひ浮べし時は、あやしく心騷ぎて、何となく胸安からず。

障子開けば、夜來の風雪全く霽れて、高く澄みたる空には雲の影も無く、嬉々たる天日、湖上長く連れる白根山脈のうへを照せば、皚々たる雪は白瑠璃の如く輝きて、其の美しきこと言ふべからず。近くは湖畔の大銀杏樹、落葉松の林、家々の屋根、雪ある處は皆輝きて、白虹爛々、恰も水晶宮裡に火を點じたるが如く、春の花、秋の紅葉、いかでか雪降り埋みたる湖山の風景に比するを得べき。

湖上　湯湖をいふ。

白根山脈　所謂日光白根なり。奥白根は最も高く前白根は稍低し。

降りたる雪の少きにや、朝餉終りて草鞋の緒結びし時は、日のさす處は大方消えて、木の蔭、山の裾、谷の底

に其の名殘を留めしのみなり。

朝風寒き山蔭の湖傳ひ、枯れたる草、落ちたる木の葉の上を踏みて、別墅の前を過ぎ、左に湖水の波白く光るを眺めながら、林をぬけて汀に出で、又再び森の間を行く。路は紆餘曲折して、榛・山毛欅の大木高く聳え、熊笹深く茂りたる草の中には、朽ちたる大木横たはりて、清水その下より湧けり。森の奥木深き處に、名も知れぬ鳥の聲幽かに聞えて、空は高し雲は白し。

龍頭が瀑　中禪寺湖の西岸にあり。湯湖の瀑の末なり。

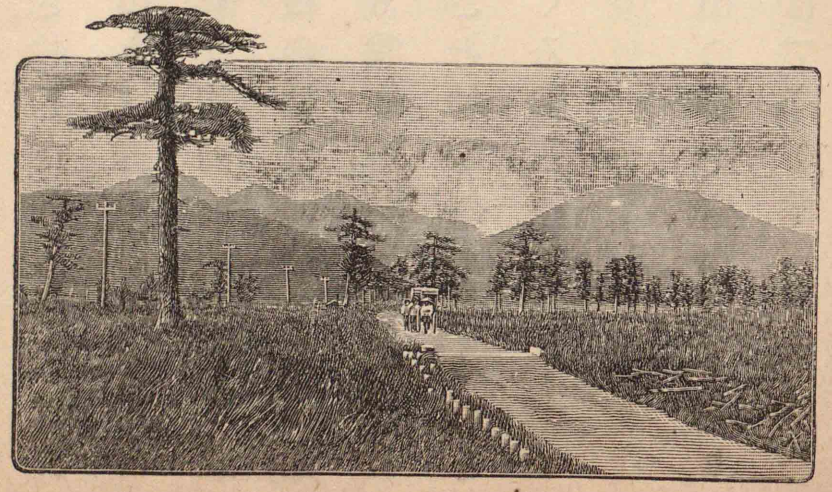
地獄谷を過ぎて龍*頭が瀑を寫生せる頃より、路は次第に急になりて、枝疎らなる落葉松の、幹白く矛の如く立つ間を行く。

登り盡したる絶頂は、荒草離々たる戰場が原の一端にして、三面山を以て圍まれたる廣漠の大高原は、眼に遮るものも無く我等の前に開かれたり。

右に紫褐色の肌を露せる男*體山の、幾條となく疊みたる皺襞に名殘の雪をとどめ

男體山　日光連山の主峰にて、中禪寺湖の東北に聳ゆ。

戰場ヶ原



太郎山　男體山の西北の連嶺に特起す。戰場が原は此の山の裾野なり。

湯瀧　湯湖の水の懸崖を下る所をいふ。

赤城山　上州三名山の一、勢多郡の北にあり。

どめ、黄土色の色麗しくまろき形したる太郎山は、其の左に連りて、最も左に高く白きは雪の白根山、其の裾に廣き戰場が原は、見渡す限り茶褐色に枯れて、遙かに遠く〳〵連りたる落葉松の林は、一抹の霞の如く山の麓に棚引きぬ。今しも我等の踏める道は、太郎山の麓を左にかけて、細きこと絲の如く消えんとして纔かに殘れり、其の盡くる處、匹練の如くかゝれるは卽ち湯瀧なるべし。

神代の昔、男體山の神と赤城山の神と爭ひし處なりといふ傳說殘るこの大高原は、二千有餘年の間、住む

人も無く、草は生ふるまゝに生ひ、枯るゝまゝに枯れ、雪は積るまゝに積り、消ゆるまゝに消えて、茫々漠々、恰も神代のまゝなる寂しき光景は、我等の胸に異樣の想像を起さしめぬ。

試みに人跡絕えたる冬の空の、野も山も雪に蔽はれたる戰場が原を想像せよ。此處には人間の力全く跡を絕ちて、ただ自然の儘なる水晶宮に神集ひに集ひたる男體山の山神、右手に白銀なす玉矛を取りて、空に向つて麾けば、遠く西の空に一簇の雲起つて、襲ひ來る風に乘つて、天降る赤城山の山神、緋に紅に耀

Lake Léman
(Lake Geneva)

く衣の色、雪に照り日に映じて、ここに矛は飛び劍は舞ひ、一大修羅場を現出したる光景は如何。あゝ、勇ましき神話の好畫題に非ずや。（日本名勝寫生紀行による）

一〇　レマンの湖

鹿子木員信

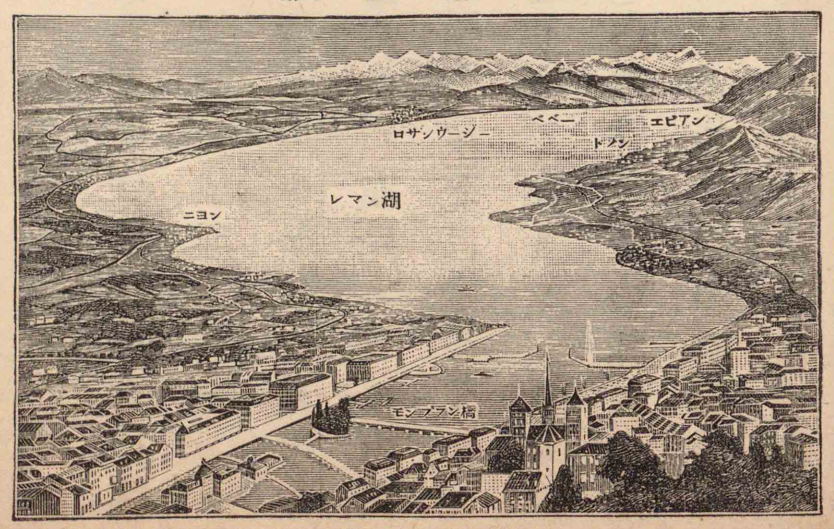
朝早く眼が醒めた。見るともなしに、窓とその向ふの壁との間に一尺ばかりすいて見える空を見つめる。すると、その灰色の空が動くとはなしに上の方に動いて居るのに氣が付いた。雲が動いてる。晴れるのではなからうか。斯う思つて尚一心に見て

Geneva
(Genéve)

Mont Blanc

ゐると、案の通り下の方から青い空が見えて來た。僕は小躍りしてはね起きた。熱もひいてゐる、氣分も幾分か好い。朝食を喫し、勘定を濟して宿を出た。そしてモンブラン橋の傍で、レマン湖通ひの汽船に乘つてゼネバを去つた。正に九時半、洗つたやうな

レマン湖



Savoie Mts.　Jura Mts.

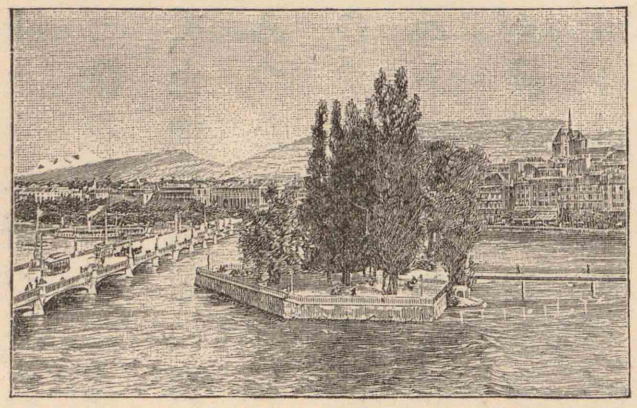
碧の空に、八月の太陽が燒付ける樣に輝いてゐる。僕はさながら生命の水を飲む人の樣に、此の力の强い日光を滿身に浴びた。

汽船は緩やかにモンブラン波止場を離れて、鏡のやうなレマンの水を蹴つて進んだ。左にユラ*の山脈ゼネバの市を護つて、その末遠く東北に走つてゐる。右にサボイ*の連山天空を遮り、遠くにモンブランがその頂を見せてゐる。美しい別莊は花の樣に、勾配なだらかな兩岸の綠を飾つてゐる。碧の空、綠の水、白い雲。水漫々たる廣き湖水の上には、白鳥の翼を

Thonon　Nyon　Rousseau

ルソーのお父さん名はイサク。

擴げた樣なヨットが浮んでゐる。燒き付ける樣に暑い日の光も、船の進行とともに涼しい風に和げられて堪へ難いとも思はぬ。自分はただ光輝・健康・生命の天地に滿つるを覺えた。汽船はゼネバを出て先づ西岸のニオン*に寄つた。ニオンは暫くルソー*の御父さんが住んでゐた所であつて、彼が「告白」に屢出る所である。それから東岸のトノン*・



モンブランの橋

Évian
Lausanne
Ouchy

Byron
The Prisons of Chillon

Vevey

エビアンなどに寄つて、また對岸のローザンの港ウーシーに寄つた。ローザンは又青年時代のルソーと緣の深い所である。彼が潛かに音樂教師となつて、土地の娘達に音樂を敎へたのは、確かローザンであつたと記憶する。ウーシーでは汽船の着く棧橋のすぐ傍に、湖水によつてホテル、ダングレテールと云ふ宿屋がある。昔はアンカーと云つてバイロンがその有名な「ションの囚人」を書いた所である。ウーシーの次がベベー。ベベーは卽ちルソーの少年時代から青年・壯年時代に亙つて深い關係を持つた

Warens
La Nounelle Heloïse.
Territet

Midi

と同時に、彼が一生に甚深な感化と影響とを及したワーレン夫人の生地である。同時に彼が書いた「新ヘロイゼ」の舞臺である。凡てローザン邊からテリテー・ションに至る一帶の地は、風光明媚な所である。日當りの好い、傾斜の緩やかな山地は、見事に手を入れた葡萄畑になつてゐる。そしてすぐ向ふの對岸には六千尺から八千尺のサボイの連山が湖水に臨んで峙つてゐる。また遙か左に寄つてミーヂの高峰が雪を被つて高い。これ卽ちルソーをしてその「告白」の中に、「ベベーに行け。そしてその土地を知り、

その景色を見、試みに舟を湖水に浮べて見よ。さうすると、天然が此のうるはしい地を特にユリーや*クレエルや、乃至はサン*プリューのために造つたものだと云ふことがひとりでに分るであらう。」と云はしめた所である。

汽船は何れも美しい*クラレンス・*モントルーなどに寄つて、テリテー・ションに着いた。僕は他の四五人の客と共に船を下りた。船の棧橋から石段を上つて、上の往還に出て、湖水に沿うて一キロ米突ばかり東に歩むと、ションの城前に出るのである。（アルペン行）

ユリー・クレエル・サンプリユー　三人ともに、ルソーの作れる小説「新ヘロイゼ」中に表るゝ人物。

Clarens
Montreux

一一　我が家の富

德富健次郎

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰かいふ「狹くしてかつ陋なり」と。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狹しと雖も、仰いで碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る。

神の月日はここにも照れば、四季も來り、風雨・雪霰かはるが、はる到りて、興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。しづかに觀ずれば、宇宙の富は、殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆ

るなり。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて、樹に滿つ。風ある日には、薄青く霞める空より、白き花ちらく〳〵と舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。鄰家に花樹おほし。風に隨ひて、飛花わが庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに滿庭花の衣を着く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花瓣あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に一株の山梔あり。五月闇鬱陶しき頃、香しき花を開く。主も妻も無口なれば、この花の我が家に

開くはうべなりけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。その幹亭々として、すこしの曲なく、わが如く直かれと敎ふるに似たり。これと手水鉢の側なる八角金盤とは、葉廣うして、わが家の雨聲を多からしむ。李熟して、白粉ふきたる琥珀玉の、滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子、一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つくぐ〳〵ぼうしの聲に、世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も、紅に燃えいで、ただ一株、前の家主の植殘したる黃菊も咲きいづ。名苑の花

美しといふとも、秋のあはれ、閑寂の趣は、却つてわが庭の一枝にあるべし。*蛻巖の翁ならば、「*獨憐細菊近二荊扉一」とや吟ぜん。恥づらくは、「海内文章落二布衣一」と唱すべき身にあらざることを。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くしては、滿樹黄金よりも黄なり。木枯の風起れば、その葉翩々として飜り落つ。半夜夢さめて、雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落添ひて、寸金と人はいふなる錦を、我は庭に敷きつめぬ。

蛻巖　梁田氏。明石藩の儒者。

獨憐細菊近二荊扉一　蛻巖の九月九日の詩に「琪樹連レ雲秋色飛、獨憐細菊近二荊扉一、登高能賦今誰是、海内文章落二布衣一」

木の葉落ち盡しては、流石に寂しげなれども、日影・月影いよ〳〵多くなりて、空を見、星を見るに、障なきは嬉し。（自然と人生）

一二　大石良雄

福本日南

*内藏助は十九歳にして出仕してから、内匠頭長*矩に事へ、所謂城代家老として概ね赤穂に在住した。それで藩政の大事は此の人の預り聽く可き所である、一切のことは樣に依つて胡蘆を畫くに過ぎない時代で、仕*置家老が多くは

内藏助　大石良雄。

長矩　淺野氏、播州赤穂の城主。萬石の大名。

仕置家老　專ら行政の任務に當る家老。

事を專決した。殊に內藏助は其の性恬澹にして、自ら用ひぬ人であるから、餘り政務にも關らぬ。のみならず君侯の前に出ても、其の才智を振舞はさないから、內匠頭もさ程の人物とも思はれず、却つて吏才に長じた當世向の仕置家老大野九郎兵衞などの方が、萬事に幅を利かして居た。併しながら內藏助に在つては、毫も是等の事を意に介しない。佩弦齋*は五井蘭洲*の瑣語に由つて此の人を敍し、「常に韜晦して露さず。人皆斥けて癡と爲す」といつた。韜晦して露さずとは回護の筆で、內藏助は殊更に韜晦して

佩弦齋　水戸藩の儒者、四十七士傳を作る。本名は青山延光。

五井蘭洲　名は純貞、大阪の儒者。

居たのでも何でも無い。其の實は天性の儘にて、不必要な場合に悧巧めかさうとも何ともしなかつたのみである。

大石良雄の遺畫

が、人皆斥けて癡と爲すといふ一事は、其の通りであつたらしい。といふは當時誰言ふともなく晝行燈といふ綽名を此の人に附けた。晝行燈、狀し得て極妙である。居常ぼ

Lincorn

んやりとして、白晝の行燈の火を看るやうな有樣が、今から回想せられるのである。「君子有盛德而容貌如愚」の聖語、內藏助に於てこれを看るといはなければならぬ。顧ふに晝行燈の綽名をば、內藏助自らも微笑して甘受して居たに相違ない。

さりながらリンカーン*も言つた通り、人は或時と或場合には欺かれるが、長き時と廣き場合には欺かれぬ。內藏助如何に恬澹でも、謙讓でも、天分の斤量は長き歲月の閒に何時となく自然に見れる。彼が一代の英雄であつたのは、事變後に至つて始めて知れ

鳩巢
本名は室直清、鳩巢は其の號。幕府の儒官。義人錄を著す。

たけれど、兎にも角にも何と無く偉い、何處にか信賴す可き所のある人だといふことは、事變を待たずして、業に既に赤穗の上下に信孚して居つたらしい。

鳩巢*此の人を傳して、「良雄人となり簡靜にして威望あり。甚だ國人の爲に倚重せらる。」といふもの、簡にして最も要を得て居ると思ふ。

事變に先だつこと八年前、元祿六年の十月、備中松山五萬石の城主、水谷出羽守勝美俄かに卒し、十一月に至り、其の養子勝淸も亦續いて歿したので、一族・郎黨相議して、出羽守の弟三上主水勝時に家督相續の事

を願ひ出た。されど家主卒後の養子を免さぬのは、當時の法制であるから、終に聞屆けられず、十二月、其の領地を沒收された。尤も祖先の功勞を思召され、主水に更めて新知三千石を賜つた。此の際幕廷からは御目付堀小四郎・駒井内匠を差遣され、淺野内匠頭長矩には、特に收城使を仰せ付けられた。それで翌七年二月、内匠頭は一隊を引卒して發向せられたので、内藏助は隨行した。扨松山に達して、内藏助は水谷の家老鶴見内藏助に會見し、樽俎折衝其の宜しきを得たので、無事に城地を開渡させた。是が頗る

吉良　吉良義央

上杉　謙信の養子景勝の後裔、當時の主は景倫實は吉良義央の子。

當時の風評に上つた。つねに淵默はして居るが、しかし赤穗には大石内藏助といふ一英物が居るといふことは、此の頃から眼ある者は看取して居たらしい。幕府が赤穗の城地公收に、近傍諸藩の兵をくり出させたのも、吉良・上杉の兩家が非常の警戒を加へたのも、此の邊の消息を探知し居たのが、其の一因に居るであらうと察せられる。さも無ければ、一個のぼんやりの「晝行燈」を、さばかり氣にする必要も無いのである。（元祿快擧眞相錄）

一三　歳の暮

三宅雪嶺

幼時は日月の過ぐるの遲きに堪へず。「稚子慇懃向人問、睡過幾日是新正。」齡漸く長じて漸く其の速かなるを感じ、更に長ずるに及び、「今年は今年はとて暮れにけり。」の感あり。又更に長ずるや、白駒の隙を過ぐるの歎あること愈〻切。遂に顧みて恍として夢の如くなるに至る。時間に差なくして、感情に差あること亦甚だしと謂ふべし。かくの如きは種々の事情に由來すべけれども、其の主たる所由は言ふまでもなく人事の忙閑如何に在り。

幼時は簡單なる遊戯を事とし、日に同一事を繰返すに止り、何事か單調を破るものあらんを望み、節供・祭日を悦ぶと同じく、歳末・年始をも悦び、頻に其の到來するを待つ。漸く長じて爲すべきこと多きを加へ、動もすれば日を忘れ、改歳を思ふこと隨つて薄し。更に長ずれば、從事する所の業務益〻繁く、或は二三年に跨るあり、或は一層長きあり。數年に亙るが如きは、事業の完成を待ちこそすれ、歳末・年始に何の興味を覺えず、唯「またか。」と言ふに過ぎず。歳末・年始に重きを置くは、其のなほ幼稚なる時の事

にして、長ずると共に之を輕んずる傾向あり。日月の過ぐるを忘るゝは、爲すべき事業の多きが故にして、烏兎匆々を歎ずるは、寧ろ其の人の爲に祝すべし。境遇に順なるあり、逆なるあり、憂慮の餘りに事を忘るゝもあれども、多數の上よりせば、日常の業務に忙殺せらるゝなり。

されど四季の循環は昔日の如し。人皆寒暑を感ずる上は、全く歳末・年始を度外視する能はず。南郭が徂徠の許に年賀に赴きしに、その蓬髪・垢面にして滔滔孫子を論ずるに會ひ、其の儘に辭し去りしも面白

南郭　服部氏、京都の人。徂徠門下の儒者。
徂徠　荻生氏、江戸の人。元祿・享保頃の大儒。

けれど、ジョン、アダムスが壯時、日誌を記し、十二月末日に至り、「今年何事を爲しゝかを省みて憮然たらざるを得ず。明年は大いに黽勉せざるべからず」と云ひしは更に面白からずや。（題言集）

John Adams　米國第二次の大統領。

一四　薩摩守仲俊古狸を捕ふる事

水無瀨山の奥に古き池ありて水鳥多く棲めり。この池に人とりありて、此の鳥を捕らんとするものを大方ころしぬ。源右馬允仲隆、薩摩守仲俊、新右馬介仲康、この兄弟三人、院の上北面にて、水無瀨殿に仕へ

水無瀨山　攝津國三島郡島本村に在り。
水無瀨殿　後鳥羽上皇の離宮。

ける頃、おの〳〵相議して、かの水鳥捕らんとて、もち縄の具など用意して行き向はんとするを、ある人諫めて、「其の池には昔より人とりありて、人多くとられぬ。思ひとゞまり給へ。」といひければ、「誠に無益のことなり。」とて止りぬ。その中に仲俊一人思ふやう、「さりとても人に言ひおどされて、さる怪しきもの見たる事もなきに、思ひ留るべきにあらず。我一人行きて見む。」とて、小冠者一人に弓矢持たせて、我が身は太刀ばかり携へて、闇の夜に道も見えねど、知らぬ山中を辿りつゝ件の池の端に行きてけり。池へ生ひかかりたる松の樹のもとに居て待つ所に、夜ふくる程に、池の面震動して、波ゆらめきて、恐ろしき事限りなし。弓に矢つがへて待つに、しばしばかりありて、池の中光るよと思ふ程に、其の體は見えねど何物か仲俊が居たる所の松の上に飛移りけり。弓引かんとすれば、池へとびかへり、矢さしはづせば、又もとのごとく松へうつりけり。かくする事度々になりければ、このもの射とめん事は叶はじと思ひて、弓を打置き、太刀をぬきて待つ所に、又松に移りて、やがて仲俊が居たるそばへ來たりけり。初は只光る物とのみ

見えしが、近づきたるを見れば、光の中に年寄りたる姥の、笑顔したるが見えけり。　拔きたる太刀にて切らんと思ひしが、いとまぢかくなりしを、能く見るに、仔細ありげに覺えければ、太刀をうち捨てゝ、むずと捕へてけり。　とられて、池へひき入れむとしけれど、仲俊松の根を強くふみはりて、引入れられず。　しばしあらそひて、腰刀を拔きて刺しければ、刺されては力も弱り、光も失せぬ。　毛むくくとある物、さし殺されてあるを見れば、狸なりけり。　これをとりて、御所へ參り、局所へ行きてねぬ。　夜明けて仲隆等來り

て、「夜前一人高名せむとて行きしが、いか程の事したるぞ。」と問ひければ、「すは見給へ。」とて、古狸を投出したりけり。「いみじき功名せられたり。」とて、人々感じけりとなむ。（古今著聞集に據る）

四方赤良　蜀山人、太田南畝の戯號。

一五　狂歌

四方赤良

生醉の禮者を見れば大道を
　横すぢかひに春は來にけり

さわらびが握り拳を振上げて

山の横つらはるかぜぞ吹く
時鳥啼きつるあとにあきれたる
後徳大寺のありあけのかほ

鯛屋貞柳
大阪の俳人。

すみだ川今は吾妻の都鳥
業平などは在五中將
富士の山夢に見るこそ果報なれ
路銀もいらず草臥れもせず

鯛屋貞柳

つむり光
江戸の狂歌師。

宿屋飯盛
石川雅望の號。江戸の文學者。

木端
江戸の俳人。丸子氏。

朱樂管江
江戸の狂歌師。

ほとゝぎす自由自在にきく里は
酒屋へ三里豆腐屋へ二里

つむり光

歌よみは下手こそよけれ天地の
動き出してはたまるものかは

宿屋飯盛

世の中は何のへちまと思へども
ぶらりとしてはくらされもせず

木端

朱樂菅江

唐衣橘洲
江戸の狂歌師。

山里は散りし紅葉の錦をも
　木綿ほどには思はざりけり　　唐衣橘洲

馬場金埒
江戸の狂歌師。

菜もなき膳に哀れは知られけり
　しぎやき茄子の秋の夕ぐれ　　馬場金埒

雪ならばいくら酒手をねだられむ
　花のふぶきの志賀のやまごえ　　作者不知

泰平の眠をさますじやうきせん

富商
河村瑞軒

たつた二杯で夜もねられず　　新井白石

一六　小蛇の疵

當時天下に雙なしなどいふ富商の子の學ぶ友となりぬる事出來しに、其の子のいひしは、「我が父なるものゝ見まゐらせて、『必ず天下の大儒ともなり給ふべき御事なり。我が亡兄の娘の候なるに合せまゐらせ、黄金三千兩に求め得し宅地をもて學問の料となして、物學び給ふやうにと、某が心のやうに申せ。』とこそ侍れ。」といふ。

我此の事を聞きて、御志の程忘るべからず。我むかし或人の申しゝことを聞きしに、夏のころ靈山とかに遊びし者どもの中、池に足浸し居けるに、小しきなる蛇の來りて、其の足の大指を舐るあるが、忽ちに去りては、また忽ちに來りて舐る。かくするがうちに、其の蛇やうやうに大きくなりしにや、後には其の大指を呑むばかりになりしかば、腰よりさすがを取出して、刄の方を

新井白石

上になして、大指の上にあてゝまつ。また來りて大指を呑まむとする所をあけさまに刺斬りたれば、うしろ様に飛去るほどに、家にかけ入りて障子をさす。伴なひしものども、何事にやといふ程こそあれ、石走り木僵れて、地ふるふ事半時ばかり過ぎてのちに、障子を細目にあけて見けるに、一丈餘の大蛇の、唇の上より頭の方まで、一尺餘斬られたるが、斃れ死したりといふ事なり。その有りや無しやは、未だ知らねど、今宣ふことに似たる所の侍るなり。初め其の蛇の小しきなりし程は、僅かにさすがをもてさし斬りし

所なるが、既に大きくなりしに至つては、一尺餘の疵とは成りしなり。われ今身貧しく窮りたれば、人知れる者にも非ず。此の身の儘にて、そこの亡兄のあとを承繼ぎなむには、その疵なほ小しきなるべし。若し宣ふ所の如く、世に知らるべき程の儒生ともなりなむには、その疵は殊に大きにこそなりぬべけれ。三千兩の黃金をすてゝ、大疵あらむ儒生と成し立てられむ事は、謀を得給ひたりともいふべからず。縱令さし斬る所の小しきなりとも、我もまた疵被らむ事を願はず。我かくこそ申したれと答へ給へ。」といひたり。後に聞けば然るべき儒生の、その娘にはあひ具せしなり。

此の事をも父にておはせし人に語り申しければ、「珍しからぬ事なれど、よき喩にもありつるかな。」と笑ひ給ひたりき。（折りたく柴の記）

然るべき儒生　黑川某といひ、父祖ともに儒に名ありし人。

父　新井正濟、久留里侯土屋利直に仕ふ。

近江聖人　中江藤樹のこと。通稱與右衛門。

滋賀の山　近江國滋賀郡滋賀村の山嶺。北比叡の脈を受け、南長良・逢坂に連る。

一七　近江聖人の幼時

村井弦齋

雪ならば幾たび袖を拂はまし
花の吹雪の滋賀の山越

それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の、眺も飽かぬ

旅なれども、是は習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれなら
で、霏々たる雪は路を沒し、凛冽たる風は膚を裂く。
辛苦の中に滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖
上の風景。　辛崎の松は暮靄朦朧の閒に隱れて、堅田
に落つる雁の聲のみ寒く鳴き渡る。　見渡せば白雪
皚々たる比良の雪、今より此の山路に掛らば、山中に
て日は暮れん、疲れし足の進み難きに、坂本の邊にて
宿を求めんかと、獨旅の少年は前路を睨んで暫く湖
畔に立ちたりしが、良久ありて思ひ返し、「彼の山を越ゆ
れば我が故郷、今一息にて母君の許に著くなるに、何

辛崎　普通唐崎に作る。近江國滋賀郡下坂本村の大字。八景の一。
堅田　同國同郡にあり。堅田の落雁は八景の一。
比良　同國同郡、木戸小松二村の西の山。比良の暮雪は八景の一。
坂本　近江國滋賀郡に在り。今坂本村と下坂本村とに分る。

とて空しく此所に留らん。　夜にてもあれ、朝にても
あれ、家に歸らば疲も厭はじ。いでく心を取直し、
今宵の中に此の山を越え
んものを」と、再び足を踏み
しめて、薄暗き山路へこそ
は掛りけれ。

中江藤樹

痛はしや藤太郎、母に逢ひ
たき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖に縋りて只一
人、辿りく て行く道の、岩に躓き木の根に倒れ、血さ
へ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、猶

我が故郷　近江國高島郡小川村。

も心を勵まして、風雪の中を登り行く。　軈て日は暮れたり。　闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌增す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。　一山寂寞として、耳に答ふる者とては、閉ぢし氷の下潛る細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響なんど、幽かに物凄く聞えて、怖ろしとも悲しとも譬へん樣なし。　斯かる難處と知りもせば、麓にて一夜を明し、者を、旅馴れぬ身の悲しさ、足に任せて此の深山路へ掛りしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。

少年は進退谷りて、半ば死せる者の如く、松の根方に打倒れたり。　起きも得上らず、少時降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、いつまでも斯くてやはあるべきと、勇氣を鼓して再び歩み行くほどに、夜もほのぼのと明け行きて、故郷も今は近くなりぬ。

懷かしの故郷や、藤太郎は昔覺えし山川・草木を眼の前に見て、忽ち足の疲も打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。　夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起出でず。　彼の家は我が友の家なりけり、此の家には我に優しき

老人有りきなどゝ、昔の事を想ひ出でゝ、坐ろに哀を催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。

見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて、復昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり、築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人無ければ枝繁れり。脩竹一叢思ふ儘に根を延ばして、彼方此方に生ひ出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れば、車井の軋る音さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。

姿は確かに母人なり。少年は忽ち胸塞がりぬ。昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出でられし事無き母様が、此の雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情無しと、湧出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈行きて、後より其の袂を引き、「母様、私が汲みませう。」と涙ながらに取縋る。

事の不意なるに母は驚きて振返り、「誰か、藤太郎、どうして此處へ。」藤太郎は細き聲、「はい、母様の御手助を致しに參りました。先づ内へお入り遊ばせ、おつむりに雪が掛りますよ。」と孝子の眞情、片時も母を此の雪

中に立たしめざらんとす。母は車井の綱を確と握りし儘石の如く立てり。「叔父様とでも御一緒か」。「いえ、一人で御座います」。母は聲を勵まし、「叔父様が一人和郎をお出しなされたか」。「いえ、叔父様には知らせずに參りました」。母は眉を揚げ、「怪しからぬ、何故そんな事を。さあお話しなさい、和郎が歸つた譯を。いえ、此處で聞きませう。聞かない内は、滅多に家へは入れません」。颯と吹來る朝風に、地上の雪はくるくると捲揚げられて、横に二人の顏を撲つ。藤太郎はありし次第を物語りぬ。母は我が子の優

大洲　伊豫國喜多郡に在り。當時加藤貞泰六萬石の城下。

しき心根に、すゞろ涙に咽びしが、忽ち思ひかへしけん、態と言葉を勵まして、「和郎は此の母の言葉を忘れましたか。和郎を叔父様に賴む時、一旦國を出たからは、天晴れ立派な人にならない内は、決して中途で歸るなと、彼程堅く言聞かせた事を忘れましたか。此の母が難儀を忍ぶのも、唯和郎を立派な者にしたい許り。立派な者にならないで、家に居て手助をしてくれたとて、何のそれが嬉しからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬ事はあるまい。母は再び逢ひません。其の足ですぐ大洲へお歸りなさい」。

餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず。力拔けて、雪の上に跪きぬ。母は其の失望せる樣子を見て、痛はしさ胸に滿ち、斯く迄我が身を思うて來りしものを、百里の道の一人旅、定めて憂き事も、辛き事も多かりしならん、せめて一日なりとも家に入れて。旅の疲を休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにして復思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば、修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。「和郎は母の言ふ事が解りませんか。」と、強くは叱れど聲は沾みぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて、「はい解りました。」「それならば今から歸りますか。」藤太郎は悲しき聲、「はい歸ります。」と素直に言ふ。母は素直に答へられては、猶更腸の絞らる思。遂に堪へ兼ねて忍び泣き、袖咬みしめて聲を飲む。藤太郎は屹として立上れり。「母樣、此の藥は輝の妙藥で、世にも得難き品、是差上げたいと態々持つて參りました物。是だけはお取りなされて下され。」と新谷にて得し妙藥を差出す。母は快く「おゝ和郎の志、是だけは受けませう。」と手に取らんとて下を

向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合す顔、互の眼には涙一杯。

母は恥しと、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、藥を手より取落してうつ向けば、雪の上にほろほろと落つる涙。

雪はなほ霏々として寒風に飛べり。母が汲置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く〳〵我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。滿天の風雪路悠々。（近江聖人）

一八　浦鹽より

太田覺眠

拜啓。春寒料峭の候、益、御清榮の段蔭ながら欣賀罷在候。さて日露問題は愈、砲火の裡に勝敗を決する事と相成候由、善鄰の友邦の干戈の間に相見え候儀如何にも悲しむべき事に候。併し東洋の平和と云ふ大目的の爲には人類互に相屠る慘劇をも忍ばねばならぬ事と存候。當港にも戒嚴令を布かれ、我が同胞は川上貿易事務官を始め、居留民一同引揚ぐる事に相成申候。併し野衲は歸路を遮斷せられて

歸朝するを得ざる者、又は已むを得ざる事情のため當地に居留する憐むべき敵地の同胞を慰問せんが爲に、一命を佛陀に捧げて敵地に踏留る事に決心仕候。　初め此の事を以て川上事務官に請へるに、事務官は稍〻怒を帶びられ、政府の命令に背くものと野納を責められ候へども、野納は既に帝國政府の保護を離れて何時毒刃に觸れ候も知れざる敵國に殘留せる同胞を見捨てゝ歸朝するに忍びず、今は斷然一命を捨つる覺悟にて、此の憐むべき同胞慰問に從事致したき決心を告げ候に、事務官は突然起つて野納の

手を握り、「君よ、予は最早君の志望を妨げざるべし。予は同胞に代りて君の高義を感謝す。　予は君一人を見殺にする罪は甘んじて受けん。　君それ佛陀の大慈悲心を發揮せよ。　さるにても旅費の準備ありや。」と申され候。　野納云く、「一片の丹心、一軀の尊像、これ野納の爲に千萬の味方に候。　尚嚢中百金あり。」と申候處、事務官は直ちに嚢底を拂ひて數百金(これを數ふるに暇なし)を惠まれ候。　野納は素より生還を期し申さず、一日にても生命を保ち候うて、成るべく一人にても多くの同胞を長く慰問致したき心願に

御座候。

只今川上事務官の一行を見送り候。今後日本人は當港に唯野衲一名のみに候。目下の暴行は露人よりも寧ろ支那勞働者に多く、彼等が家財を奪はんと襲ひ來る勢甚だ猖獗に候。今夜は須彌壇の中に隱れて一夜を明し、此等勞働者の掠奪を恣にせしめ申すべく候。明朝は彼の北清事件の當時支那人虐殺を以て有名となりたるブラゴエチエンスク*に向ひ、順次各地の殘留者を慰問仕るべく候。野衲の此の行はかならず佛陀の冥助あらせ給ふを確信仕候。

Blagoveshchensk 黑龍江州の首府。

謹んではるかに東方を望み、我が陛下の萬歲をいのり奉り候。敬具。

二月十二日最終の引揚船出帆に際し、浦鹽の棧橋にて認む。

一九　佛國の志士ガンベッタ　その一

仲秋の夜は次第に更け行き、今まで空を仰いで、故郷なるライン河畔の秋色を思ひやりし普軍も、多くは眠に入りて、露營の夢漸く濃かなる頃、忽ち一箇の輕氣球は巴里城中より現れて、次第に空に昇騰し、軈て

視界の外に遠ざかりゆきぬ。そも此の氣球を操れるは誰ぞ、これ實に佛國の英傑にして、獨眼龍の名高きガンベッタ其の人なり。

ガンベッタ

ガンベッタ　Gamleta

當時　西暦千八百七十年、普佛戰爭當時、ガンベッタが輕氣球にて巴里を出でしは十月七日。

當時普軍は十重二十重に巴里を圍みて、地方との交通を絶ちしかば、巴里城中の不便甚し。多數の國民、義勇軍を集めて快く一戰せんとするも、内外相應じて事を爲すに非ざれば、普軍を打破る能はざりき。

茲にガンベッタは、燃ゆるが如き愛國の至情に驅られて、ナポレオン三世が連敗の屈辱を雪がんと熱中し、如何にもして地方と連絡し、ツールの政府分局を鞭撻せばやと思ひ詰めし結果、忽ち一計を案出し、尋常の方法を以てしては到底脱出すること能はざるべし、予は九死に一生を得る覺悟にて、未だ敵だに心付かざる輕氣球に駕して城外に出でん」と決心せしかば、十月七日、夜陰に入るや、輕氣球に打乘り、巧みに普軍の目を眩まして、秋天

ナポレオン三世

ツールの政府分局　ツールは Tours　ロアール河畔の舊市。パリ包圍後暫く佛國政府の所在地たり。

高く飛揚し、九日無事ツールに着したり。

彼乃ち同府の人々に向ひ、其の衷情を披瀝して曰く、「巴里は今横暴なる普軍に抵抗して一歩も讓らず、此の際、諸君が第一に心懸くべきは、外敵を剿滅する事と、共和政治の精神を體得して、内に相和する事とにあり」と。

斯くてガンベッタは政府分局を管し、頻りに巴里外の國防軍を集むることに力めたり。

佛國の或地方の如きは、往々戰爭に就て冷淡なる態度を取り、又反對するものさへ少からざりしかど、ガンベッタは、夜を日に繼ぐの勢にて演説を續け、或は

路上に、或は汽車の窓に、或は停車場に、其の長廣舌を揮ひて、愛國心を鼓舞せしかば、其の反響は次第々々に現れ、終に數十萬の兵を集め得て、北軍及びロアール軍と稱する二個の義勇軍を編成し、普國に向つて嚴然一敵國の如き觀を呈しぬ。

モルトケ　Moltke

普將モルトケ*は、ガンベッタが義勇軍を組織せしを見るや、先づ之を破らんと欲し、巴里攻圍軍の一部をタン*將軍に授けて、ロアー

タン　Tan

オルレアン　Orleans　巴里の南西鐵路七十五哩にあり。

オーレル、ド、パラジン　Aurelles de Paladines

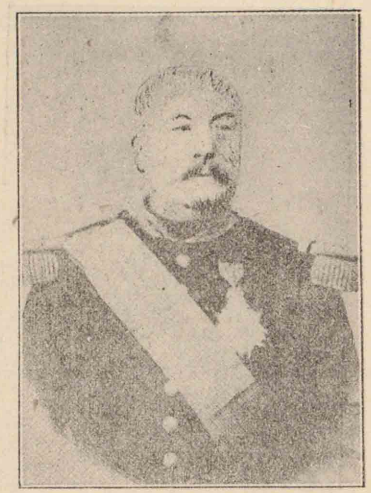
メッツ開城　Metz　メッツはローレンス州にある要塞。佛のバゼーヌ將軍は八月十八日以來ここに籠城し、十月二十一日遂に降服せり。

ル軍に赴かしめたり。十月十一日、普佛兩軍はオルレアン市外にて接戰し、普軍終に勝つて、オルレアン市に入りたるが、ガンベッタは尚も屈せず、更にオーレル、ド、パラジン將軍に司令の權を與へて普軍に抗せしめ、其の勢次第に旺んならんとせり。然るにガンベッタが、斯くまで苦心せしに關らず、他より一事件起りて、ガンベッタの事業に大打撃を與へたり。即ちメッツの開城是なり。

二〇　佛國の志士ガンベッタ　その二

バゼーヌ　Bazaine

八月中旬以來、メッツに籠城せるバゼーヌ將軍は勢日々に蹙りしかば、終に恥を忍んで開城することとなり、十七萬の將士悉く捕虜となるに至れり。時正に秋風肅殺として、黄葉地に落ち、初霜の銀光寒き頃なれば、開城の將士は、慘として悲痛の色自ら其の面上に現れぬ。



バゼーヌ

メッツ城既に陷るや、普軍は其の鋒先を一轉して、ガンベッタが組織せる義勇軍に當る事となれり。ガ

ンベッタは大に焦慮し、パラジン將軍に旨を含め、巴里に向つて疾驅せしめぬ。パラジンは、暫く準備を整へて、今や巴里の攻圍軍を衝かんとせしが、未だ其の事に及ばざる中、十一月二十八日カール親王の軍と激戰する事となれり。

カール親王

カール親王 Karl 時のドイツ皇帝ウイルヘルム一世の甥。

かくて兩軍數日相爭ひたる後、パラジンの軍遂に破れ、左右兩翼に激しき攻撃を受けて、潰走するの止むなきに至りぬ。爾來佛軍の旗幟毫も振はず、巴里攻

圍の一方を突破せし軍も、亦破れて巴里城中に引返し、アミアン附近に陣せし北軍も同じく破れ、佛軍の形勢刻々不振に陷れり。

アミアン Amiens

此に於てガンベッタは、悲憤の情胸裡に横溢し、「我が志斯の如く齟齬するは、皇天予を憎み給へるにや、嗚呼我が至誠は、未だ天人を動かすに足らざるか。よし、予は尚最後の勇斷に出で、一擧憎むべき敵を苦むるの策を執り、勝利の月桂冠を我が手に收めん」と、自ら其の心に鞭ち、十二月下旬、ロアール軍をチャンジー將軍に授けて、カール親王の軍に當らしめ、ブール

チャンジー Chanzy

ブールバキ Bourbaki

バキに一團の兵を與へて、南部の國防軍を併合せしめ、以て獨逸の本土に侵入せしめんとせり。此の計畫は巧妙ならざるにあらざりしも、佛軍の多數は新兵にして實戰に馴れざりしかば、精鋭なる普軍と互角の爭を爲すに堪へず、連戰連敗を重ねてブールバキの軍は、遂に瑞西國内に追ひこまれぬ。爾來講和談判の成立するに至るまで、佛軍は一度も勝利を得ず、ツールの政府分局は、普軍の爲に威赫せられて、十二月九日ボルドー*に移りたりき。

ボルドー Bordeaux

斯の如くガンベッタの爲す所は、多く失敗に歸し、無用の犧牲を費せしに似たるも、國民精神を鼓舞する上には、非常なる力ありき。今此に少しく彼の經歴を記さんに、彼は一千八百三十八年四月の出生にて、最初辯護士として身を起し、法廷にて或事件に就て辯護せし時、其の識見辯舌共に非凡なりしより世に知らるゝに至りぬ。やがて選ばれて議會に席を占むることとなるや、其の硬骨にして率直、併せて豪快の風あることは、時人をして等しく推重せしめたり。而して普佛戰爭起り、國家多難となるに及び、彼は一身を賭して東奔西走し、爲に頭髪悉く白變せりと傳

へらる。かくしてガンベッタの名は、佛國の志士として千載青史を照すに至れり　（通俗世界全史による）

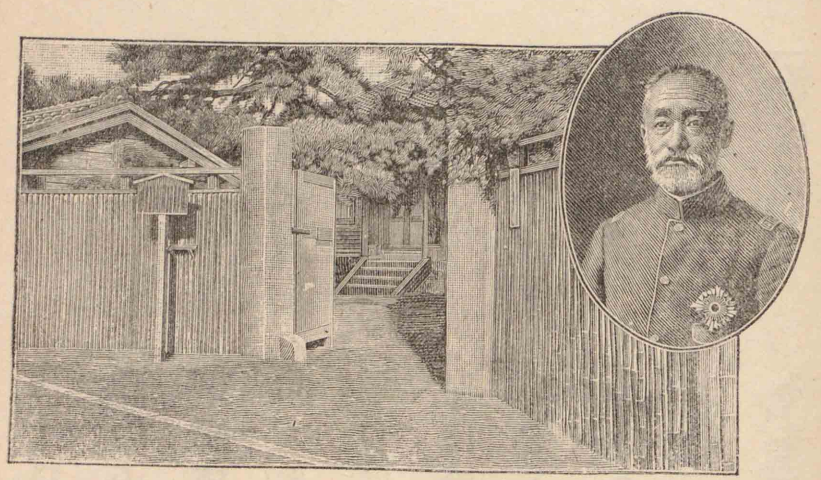
二一　乃木將軍

森鷗外

一

つはものゝ　武勇なきには　あらねども
眞鐵なす　*ベトンに投ぐる　人の肉
往く者は　生きて還らぬ　强襲の
鋒を　しばし轉じて　右手のかた
圖上なる　標の高さ　*二零三

*二零三　Beton　コンクリートの一種



乃木大將邸

二百三高地。標高二百三米突あり。又爾靈山とも呼ぶ。

いただきの　二つ聳ゆる
石やまに　たえぐの
望のいとを　懸けてこそ
きのふけふ　軍の主力を
向けてしか

二

霜月
明治三十七年。

霜*月の　三十日の　夕まぐれ
將軍は　高崎山の　師團より
ただ一騎　柳樹房なる　本營に
歸らんと　曲家屯をぞ　過ぎたまふ
ほの暗き　道のほとりを　見たまへば、
身うち皆　血に塗れたる　卒ありて
そびらには　はやことときれし　將校の
亡骸を　かきのせてこそ　立てりけれ

三

「汝は誰そ　そを何處にか　負ひてゆく」

「聞し召せ　背負ひ奉るは　奴わが
主と頼む　乃木將軍の　愛兒なり
年老いし　將軍の家の　二人子
そのひとり　勝典(カツスケ)ぬしは　いちはやく
南山に　うたれ給ひて　殘れるは
おとうとの　保典(ヤススケ)のぬし　ひとりのみ
背負へるは　その一人子の　亡骸ぞ

四

父君は　心をゝしく　我が主をも
隊附の　まゝにあらせて　「討死の

身の果は　おのれと三人　葬をば
ひと時に　營め」と宣り　給ひしを
人々の　強ひて計らひ　つるにより
さいつ頃　友安旅團の　副官に
職かはり　まだ程經ぬに　この朝開
あへなくも　空しき骸と　なりましぬ

五

果てましゝ　處は高地　二零三
目鏡もて　敵の備を　望みます
うら若き　額のたゞ中　打ちぬかれ

ひと言を　のたまはん　ひまもなく
持口の　南の峰に　うせたまふ
その骸を　奴背負ひて　この村に
ありと聞く　野戰病院　たづぬれど
くるほしき　心からにや　たづねえず」

この村曲家屯。

六

かくいふを　駒をとゞめて　聞きましゝ
將軍は　病院の旗　ある方を
鞭あげて　「彼方にこそ」と　さし給ふ
面ざしは　たそがれ時に　見えねども

目ざとくも　雲の絶間ゆ　覗ひし
さむ空に　まだ輝かぬ　冬の星
更闌けて　友なる星に　「將軍の
睫毛だに　動かざりき」と　語りけり

（うた日記）

二二　君府に於ける古今興亡の感

Constantinople

君府（トルコの首府コンスタンチノープル）

君府ベラパレスの樓上に覺むるともなく夢覺め、あくるともなく眼を開くれば、月光室に入りて、旅情轉た寂寞たり。乃ち起出でゝ、窓を推し、月光に洗はる

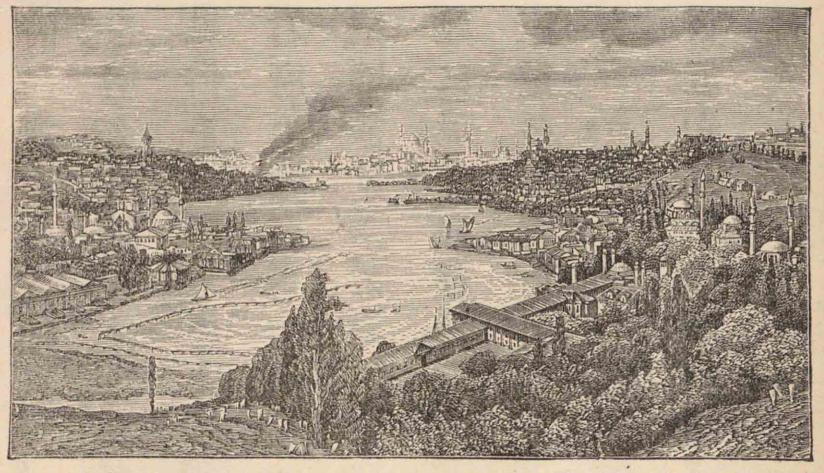
Bosphorus

る滿都の景を眺むるに、人眠り夜靜かに、鷄犬の聲遠く聞ゆ。時宛も十五夜に當り、半月國に滿月輝き、ボスフォラスの海水亦滿々たり。懷ふに此の都、二千五百七十一年前、卽ち我が神武天皇の御卽位と前後して、其の基を開かれしなるが、此の水此の月は昔ながらにして、此の國此の人はすなはち同じからず。現住土耳其人の此の國に入りしより四百五十年、時運轉換して、東羅馬の衰滅せし運命は、今や方に半月旗に及ばんとす。遊子豈多少の感慨なからんや。

案内を傭うて、翌日より君府を見物す。茲處は其の

Marmora
Galata

地形もとマルモラ海と金角江とに包まゝる二等邊三角洲なりしを、今は前岸に打伸びてガラタ半島に王宮も政廳も移り、ボスフォラス海峽に面する風光絶佳の大市街となれり。人口百十萬、皆小豆色の土耳其帽を戴き、支那人の擾々焉たると同樣、土耳其人も亦擾々焉として、市街に溢れ群るさま、いかにも東洋的なり。この小豆人形に似たる百十萬の都民に對して、舊市と新市を繫ぐ金角江上の橋梁は唯二つ。しかも一は交通少き上流に架せられたれば、マルモラ海に接する樞要の地に架せられたるガラタ橋は、



コンスタンチノープル

その混雜言はん方なく、一日の通行者十五萬を超ゆといふ。しかも一々橋錢を取るに、土耳古の貨幣の複雜にして勘定し難き、容易に旅客の解し得る所にあらず。故に橋の上の混雜は終日にわたり、恰も市場かさかり場の如し。其の上、汽船の棧橋も橋上に設けられたれば、橋は同

Constantine, XIII. Gate of Romanis Osman

時に海岸たる趣あり。黑煙橋上を蔽ひ、汽笛時に耳を劈く。試みに此の橋上に立たんか、土耳其一切の風俗を見得るのみか、萬國の衣冠をも觀察し得べし。君府の輪廓を領略するには、先づ其の陸地面を繞る城壁を見ざるべからず。城壁は一千五百年前の創建に係り、以後オスマン朝代々の修覆に成るといふ三重の要害なるが、今や頽廢して其の形を存するのみ。ロマノ門といふは西北に當る一要喉にして、四百五十八年前土耳其兵先づ此の門を破りて君府に侵入し、コンスタンチン第十三世帝此處に戰死して、

居庸關　支那直隸省順天府昌平州の西北に在る關。

東羅馬もあはれ土耳古に滅され畢んぬ。其の門を弔ふに、遠く小亞細亞より此の都に入來りし幾隊の駱駝は、首を天に朝して高く鈴をかけ、その音鏘々、一千年前の顏つきにて、世の汚隆、時の興亡をも知らず顏なり。余は坐ろに萬里長城の外より居庸關に入來る蒙古の駱駝隊を想起し、風物何となく支那に似たるを感ず。其の興亡の跡亦相似たるものなきにあらず。實に支那は東洋の土耳其にして、土耳其は歐洲の支那なるかを思はしむ。政治に文化に、馬蹄を以て人の國都を亡せし點も、領域の大にして內容の

複雜なる點も、將、現時國際の關係も、土耳其が革命を起し前王を追ひて今帝を立てしと、支那の革命を起し舊王を追ひて共和となせしと略、亦相似たり。

今後の運命も亦相同じきものあるにあらずやとも思はる。　余は歐洲の大都、通邑に遊び、其の趣味の大同小異にして、多くは範を巴里に取り、倣うて新を加へたるもののみなるに、君府の趣味の全く別種なるを見て、言ひ知れぬ感慨を催し、余が腦裏に甚深の印象を殘したり。　知らず、東洋人は共通の血脈を有するが爲か。

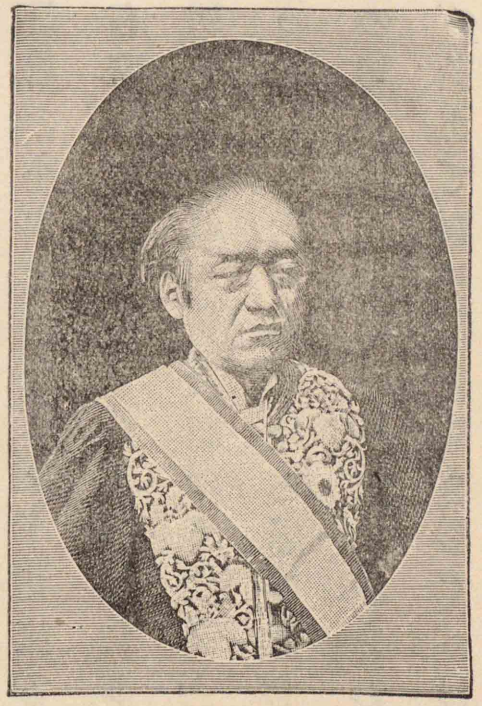
（鳥居素川―「頰杖つきて」に據る）

二三　岩倉右府　その一　井上　毅

月日の小車はめぐり〳〵て流るゝ水よりも早く、故右府公の世を去りたまひしより、今ははや十年あまりぞ過ぎぬる。「大詔のまに〳〵、我が國を富士がねの安きに置かでやは。」と思ひ入りたまへる公の一筋の誠心は、天地のあひだに滿ちわたりて、極みなき後の世まで語り繼ぎ、聞きつぐべければ、今更にいふまでもなきことながら、公の逸事の一二を思ひ出づるまゝに書きしるして、世の鑑ともなし、史人の料とも

なさん。

維新の初に、「神武の古に復る。」といへる大義を定められしは、此の公の輔翼の力にぞある。碩學野々口隆正氏の説に、「建武中興の振はざりしは、當時の搢紳に其の人なきによれり。源親房卿は學識ありて、時の帝の御覺もめでたかりしかど、其の人の所見は



岩倉具視

野野口隆正　石見國津和野の藩士。

源親房卿　北畠氏。後醍醐天皇の御代の勤王家。

延喜・天曆の跡に復るにありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ公家・武家の間に隙を生ぜしなれ」といへり。

故右府公は搢紳・有職の家に生ひ立ちたまひしかど、夙に大勢を達觀して、王政に公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐるために、「神武の古に復る。」といへる一大義を唱へたまへるは、これぞ明治の朝廷に人ありとは申すべき。此の一大義は百揆・庶政の原動力となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤根・錯節を、すべて破竹の勢を以て破りたり。世の人は明治

延喜　醍醐天皇の年號。

天曆　村上天皇の年號。

藤原氏　中臣鎌足に藤原氏を賜ひしより天智天皇の御代也。

の中興は五百年來の武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心ある人は溯りて天平以來の宿弊の更に破り難きを破られたることを知るならん。

天平　聖武天皇の年號。

徳川氏の大政を返上せし際には、公は譴を蒙りて久しき間岩倉村に蟄居し、天日をも見たまはざりしが、

岩倉村　山城國愛宕郡に在り。上賀茂村の東北なり。

俄かに召によりて夜中參内し給ひけり。このをり公は一の大嚢を携へて宮門に入りたまひしが、嚢中の文書は皆公の蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。

玉松操　京都の勤王家。

此の時大勢なほ定まらずして、物論紛々たるに、公は

俄かに躬を以て責に當り、從容應答して、雄藩の主も爲に容を改め、朝議大いに決するに至る。而して大令一度發して、外は將軍を廢し、内は攝關・議奏・傳奏を廢し、親政の洪圖を旬日の内に定め、後世動かすべからざる基礎を建てられたるは實に公の輔翼の力なり。「就中、復古の第三日に、禁闕に達文を掲げられて、女房の請謁を納るゝ事を痛く禁止せられたるは、これぞ數年の宿弊を除き、將來の爲に一大美事を遺したる。」とて、公の晩年に親しく物語したまひき。此の一事は扇の要なりとは知る人ぞ知らん。

二四　岩倉右府　その二

玉松操は一の偉丈夫なりき。平生聲色を近づけず、酒肉を嗜まず、書を讀むを樂しみとなし、夙に神武復古の說を抱きぬ。偶、公に知られて、蟄居の一室を貸與へられ、起居を俱にして畫策するところあり。公は玉松の功を推して、「己の初年の事業はみな彼の力なり」と迄のたまへり。薨去の前年に、一夕殊さらに余を召して、玉松の履歷を物語りたまひ、「其の人の功績を空しくなせそ。書きしるして後の世の語り繼

ぎの料とせよ」と慇懃に仰せられけり。此の夜余は他の二人を誘ひてともに侍りしが、其の中の一人はもれなく公の物語を筆に留めたり。己の功を推して人に讓りたまふこと、いとめでたし。

其の後、公の朝廷に勸めまゐらせ、斷然と開國の國是を執らるゝに及びて、玉松は「姦雄に誤られたり」との一語をいひ放ちて、公の許を辭し、召されても應へだにせず、一室に屏風をたて籠め、其の中にて讀書に日を送りけるが、「功を論じ、賞を頒つ日に逢はずして、世を去りぬるぞ歎かはしき」とぞ公ののたまひし。

大久保 名は利通。
木戸 名は孝允。
小松 名は清廉、帶刀と稱す。
廣澤 名は眞臣、通稱兵助。

公は蟄居してゐましながら、其の家の裏の隱戸より、人知れず大久保・木戸・小松・廣澤等の諸名士を引きて、內外の大勢を談論せられ、此の時既に鎖國の非なる事を悟られつるに、玉松は露ほども此の事を知らざりけり。彼が口をしく思ひつるも理なりき。

維新後の公が翼贊の功は明治の大御史と倶に後の世に傳ふべきなれば、こゝに書きつゞくる要なけれど、公は己の勞を露ほども誇りがほに人に語り給ふことなかりしほどに、史人もえ知らぬ事ぞ多かめる。世の人は明治二十年と二十二年との條約改正中止の件をば、何某の盡力にて、となりし、かくなりしなど、事々しく言ひはやせど、此の事の起りは十五年にて、公は飽かず思し召す事ありて、一方ならず心を盡したまひ、其の折一たび中止とはなれり。されども公は深く祕め給ひて、文書一箱程もあるを家に藏めて出し給はざりしかば、內々の人ならではえ知るものなかりき。是等は後の人の鑑にこそ。

剛膽は政治家の第一要德なりとぞ聞ゆる。公は長袖の人とも覺えぬばかりに、剛毅の德を備へおはしけり。「征韓の議、今にも蕭牆の內に變亂を見んとす

征韓の議 明治六年。

る時、陸軍將校の中にて勇武のきこえある一人は公の邸に參り、客室に謁見し、一應二應議論の末、其の人怒れる眼、血を濺ぎ、毛髪倒に竪ち、脇差を左の手にて鞘もたわむばかりに握りつめ、「貴殿もし意見を枉げたまはずば、御身の爲に惡しかりなん。」と言放ちつゝ、膝と膝との間一尺ばかりにまでつめかけたり。此の時公の家の侍ども、次の間に控へ居て、障子の隙より窺ひつゝ、あはやと手に汗を握りたりしに、公はすこしも動ずる色なく、自若として其の座を守りたまひき。とぞ内の人の物語りし。

我をおきて云々　萬葉集卷十八大伴家持の歌に「大君の御門の守り我をおきてまた人はあらじと云々。」

隱さはぬ云云　萬葉集卷二十大伴家持の歌に「君の御代御代隱さはぬ明き心を皇邊に極め盡して云々。」

公の畏きあたりの御覺殊にめでたかりしは世の人の知る所なるが、大君の御爲とならば、我をおきて人はあらじと、思ひたまへる隱さはぬ明き心の深かりしは、これぞ君臣水魚とも申し奉るべきか。雲の上の事は筆に載するも畏ければ洩らしぬ。

二五　岩倉右府　その三

公は大久保故内務卿と心交特に深くおはしき。岩倉村蟄居のをりより、大久保卿は密々の往復頻なりしが、「公の身の上心もとなし。」とて、夜なく年少き侍

を遺して守衛せさせつることもありしを、公は知りたまはざりき。西南の亂平ぎし後、兩公の間に契り給ふ事ありしが、日ならざるに大久保卿の遭難とはなりぬ。一日公の物語に「世の人大久保の志を知りたらんには、いかばかりか哀しみ思ふらん。『維新のはじめ十年間は創業撥亂の時なりき。これより後十年こそは内治を整理し、民利を進むる時なれ。』とて、將來のために大いに計畫する所ありしに、料らずもかたみの言葉となりぬ。」とのたまひき。

公は夙に開國の國是を唱へ給ひつゝ、又厚く國體の

薨去の前
公の薨去は明治十六年。

基礎を重んじ給ひき。晩年公の奏上によりて、宮内省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺制の貴きことを世に知らせん爲のはからひとぞ聞えし。

公は勤儉の二字を大政の本として、輔弼に心を盡させたまひき。又家を治むるにも儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、「岩倉村の蟄居の時をな忘れそ。」とて、常に公達を戒めたまひけり。薨去の前、家範を作り、「後の世まで守り文にせよ。」とて、子孫に遺したまひしが、其の附錄一篇は專ら奢侈と遊惰とを戒めたまひ、重き病の床にましく、つゝ、親しく

旨を授けて、さむらふ人に筆執らせたまひし條にぞある。一門の人々が案文に調印せしは七月十五日にして、薨去の前五日なりけり。今はの際に遺言ありて、「己の墓石は父君の墓石の寸法に準へよ」とありきとなん。

公は日に夜に公の事にのみ心を碎きて、寸時も餘りの暇あらせたまはざりき。朝五時前には目を覺し、「侍やある」と聲かけさせたまひ、「今日は何某をば何時に召せ。次に何某をば何時に呼べ。又明日は何某に何時に來れ。何某に夕何時に參れ」と記して申し

遣せ」など仰せられき。多くの公達は父君の代筆として、文かくことに忙はしかりきとなん。公の病に侵され給ひつるは明治十六年の春なりしかど、後より思へば、十五年の頃より何となくあらざらん後の世の心づくしの節々を、知る人に語らせ給ひしことぞ多かりける。同年の冬、或人の許に贈り給へる書の末に、

さりともとかきやる浦の藻鹽草
誰が下りたちてかづきあぐらん

とぞありし。先だつも後るゝも世の習ひとはいひ

ながら、御國のために行末を思ひやられし公の心こそいとあはれなれ。

公の平生の仰に「大臣たるものは、其の身の進退によりて節操を二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざるもの多きぞ口惜しきことの極みなる。われこそ躬を以て人臣の標準を示さめ」とのたまひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げんことを思ひ立ち給ひ、同僚の諸卿が支へ止めまゐらせしも聽入れず、「是非に」とて歎き請ひ給ひしかば、上には忝くも誠ある意ばへを酌ませ給ひ、聞屆けさせ、厚き惠の

御勅をさへ下し給ひけり。かくと承りて、公はさしもに重き衾を押退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝しつゝ、急ぎ家の子等を召集へられ、「今日こそは病の輕きを覺えたれ。それ杯まゐれ」とて酒を賜ひけり。

人々歡の色をなしたりけるが、さて其の翌日に事重らせたまひぬるぞかひ無き。今はの際まで、夢幻の間にも公の事のみ心に懸けさせたまひ、無からん後の事までも、人もて雲の上にきこえ上げまゐらせしこともありきとなん。（梧陰存稿）

二六　公子の躾方を申し遣す

徳川齊昭

餘寒の處、その地子供等、*緑の間にも障なきは一段の事に候。去る二十七日、餘四麿こと神勢館へ行き候由、これよりは歩行又は乗馬にて度々行き候が宜しく候。朝も未明より起き、水にて顔を洗ひ、薄著にて庭などに出で、子供相應いたづら致し候が宜しく候。風を引き申すべしなど申して、用心致させ候は以ての外に候。

とかく武士の子は手づよく、手あらに成長致し申さ

緑の間　齊昭の生母。
餘四麿　齊昭の第十四子昭訓。
神勢館　水戸城外の細谷村に設けたる砲術練習場。

ず候うては、おひく〳〵成長の上、公家や町人・出家のやうに成りゆき、天下の御爲を致し候やうに相成らざるゆゑ、何分にも手強く體を幼年より鍛へて育て候やうに致したく、さて文武共に出精致させ候が宜しく候。文武を勵まし、それにて死に候ほどの子は惜しからず候へば、死に候うても苦しからず候。他家へ養子に遣し候うても、柔弱にて、文武これなき者にては、水戸家の外聞よろしからず。外聞宜しからざる子供が成長致し候位に候はゞ、死に候方遙かに勝り候故、表の附の者並に伊*勢等へも申し聞け候うて、

伊勢　餘四麿附の女の名。

前文のとほり手荒く仕立て候うて、文武を勵まし申すべく候。奥にても、附の者に申し聞け候うて、讀書のさらへ等をよく〳〵致させ申すべく候。文武稽古の間は、前文に申す如く、神勢館又は好*文亭等へ歩行致し候が宜し、又相手などゝ竹刀打致し候が宜し。子供の大人の如く致し居候は身のこなれ惡しく、宜しからず候。

如才はこれあるまじく候へども、序にまかせ申し遣し候。牛乳は人乳をやめ候程の子供は誰が用ひ候うても宜し、毎朝取立ての乳を呑ませ申すべく候。

好文亭　水戸の西郊偕樂園の中にあり。

一人にて五勺か一合も呑み候はゞ足り申すべく候。一*橋よりも今以て日々取りに來り、一二合許りづゝ遣し申候。何よりも牛乳に越し候藥はこれなしと存候也。

尚々、餘四磨始め、毎朝の水は、只今にても浴び居候事と存候。若し浴び申さず候はゞ浴びせ申すべく候。さるかはり、湯はつかはせ申すまじく候。

一橋　齊昭の第七子慶喜、出でゝ一橋家をつぐ。

前將軍家　第十五代德川慶喜。

二七　幕末論　その一

福地源一郎

前*將軍家は勢に迫られて、伏見、鳥羽の戰を開くに及

伏見・鳥羽
山城國紀伊郡に在り。
伏見・鳥羽の戰
明治元年。

薩・長
薩は薩摩藩。七十七萬八百石。藩主島津齊彬。
長は長州藩。三十六萬九千石。藩主毛利敬親。

びたれども、戰亂は素より其の志にあらざりしかば、恭順・謹愼の念は已に大阪城を出でたる時よりして定まりたるものか。但し伏見・鳥羽の戰に、幕兵が散散に打敗られて退きたること、實に天運の然らしめし所なりとは雖も、抑〻出兵の策宜しきを得ざりしによるものと言はざるべからず。

此の時に當り、京都に在りける薩・長の兵は、慓悍なりと云へども、僅かに數千に過ぎず。討幕の密勅は、薩・長の臍を固めしめたりと雖も、他の諸藩は依違の間に在り。幕府依然として大阪に據りて自重し、海に

會・桑
會は會津藩。二十三萬石。藩主松平容保。

は其の軍艦を攝海に繫ぎて、西南よりする通路を塞ぎ、陸には兵庫の關門を鎖し、淀川の水路を阨し、山崎其の他の要所に護兵を配付して、以て諸方の連絡を斷たば、京都は宛然敵圍の中に在るが如き形勢となり、薩・長の懸軍は死地に陷り、戰はずして自ら潰ゆべかりしなり。是を幕府の爲の上策なりとす。然れども勅使頻に降りて、前將軍家の上京を促され、これを推辭すること能はざりしとならば、前將軍家は斷然汽船に投じて東歸せられ、大阪城の留守を會・桑に託して、前策を行はしめらるべかりしなり。是を中

桑は桑名藩。十一萬石。藩主松平定永。

策なりとす。此の兩策とも行ふべからずして、必ず京都に攻上りて、以て一戰に薩・長の兵を破り、君側を清むべかりしならば、全軍の力を集めて、一擧直ちに山崎街道に向ひ、鼓譟して京都を突くの策ありしのみ。是を下策なりとす。彼の狹隘の路に向つて兵を分配し、側面の攻擊を意とせず、加ふるに數隻の軍艦を有し、海軍に於ては全國中、幕府に敵すべき諸藩無き好地位に在りながら、斯かる無策の軍略を行ひたる事、苟も兵を談ずる者は、必ず幕府の爲に奇怪の思をなす所なりとす。當時幕府の將校中、豈此の觀

洛中　京都市中。

易き兵理を知る者なからんや。

然り而して其の言の行はれずして、彼の無策の出兵に歸したるものは何ぞや。他なし、幕府が恃むべからざるを恃みたるが故なるのみ。幕府の當路者おもへらく、「薩・長の兵數千、敢て恐るゝに足らず、前將軍家の大旆一たび京都に向はゞ、他の諸藩は靡然として幕府に隨從し、薩・長の孤軍は戰はずして潰散すべし、在京の諸藩もまた皆戈を倒にし、銃を後にして、背後より薩・長の兵を攻擊し、以て幕府に應ずべし。砲聲一度伏見・鳥羽に聞えんか、洛中處々に火の手上り

て、敵は前後挾撃を受くるに至らん。兵略の如何は問ふを要せず」と。現に幕府諸老は、出兵の方略を論じたる將校に向つて、往々之を公言して憚らざりしなり。蓋し京都内應の事は、之を幕府に内議して密約せる輩ありしを以て、幕府は輕々之を信じたる事とは知られたり。若し幕府にして、彼の上策を採つて大阪城に自重せば、維新の功業は、斯く容易に其の績を見難かりしならんか。

二八　幕末論　その二

箱根　相模と伊豆・駿河との間に聳ゆる山。

碓氷　上野と信濃との間なる山。

扨、前將軍家東歸の後、幕府文武の議論は、概ね皆主戰の一方に傾き、或は「箱根・碓氷の險に據つて官軍を防ぐべし」と云ひ、或は「濃・尾の間に兵を進めて戰ふべし」といひ、或は「再び東海・東山の兩道より、大擧して京都に攻上り、海軍と相應じて大阪城を回復すべし」といふものありて、軍議紛々たりき。然るに、前將軍家が固く恭順の議を執りて動き給はざりしが故に、幕議は遂に謝罪・降伏とは決したりき。此の時に際し、若し幕軍防戰と決したらんには、勝敗の決、逆覩し難かりければ、其の戰亂は延いて數年に至り、全國の蒼生

塗炭に苦しみたらんは必然なりき。しかのみならず、當時最も恐るべかりしは、外國の干渉なりき。佛帝那破崙第三世漸く東西に志ありしが、之を交趾に試み、之を墨西哥に試みて、其の意の如くならざりし折柄といひ、加ふるに當時佛國に在りし民部大輔が大いに帝の優待を得たりしかば、幕府の士大夫中には、佛國の應援に依賴し、其の兵力を假りて、以て薩・長其の他を平定するの議を首唱し、幾分の勢力を占めんとするに至れる者もありしをや。若し此の議にして行はれたらんには、日本帝國の金甌は、爲に永く

源賴朝云々　幕府の叛立は後羽鳥天皇の建久三年。（一八五二）

一闕を生じて、不測の禍源たるべかりしなり。然るに、前將軍家は、斷乎として斯かる邪議を却け、一意に恭順を表して動き給はざりき。其の一身の生命を犧牲にし、德川氏の存在を犧牲にして、專ら國家の幸福と國民の安寧とを望まれたるは、決して尋常の思想に非ざること知るべきなり。然らば則ち前將軍家は、德川氏滅亡の際に臨みて、能く其の終を全くせしめたる明將軍なりといふべきにあらずや。

嗚呼、源*賴朝が始めて幕府を剏立せしより七百年、其の間、武門にして大權を掌握して天下を治めたるも

の、曰く源氏、曰く北條氏、曰く足利氏、曰く織田氏、曰く豐臣氏、曰く德川氏。而して其の滅亡の時に於ても、國家の爲に、國民のために、其の社稷を犧牲にしたるものはひとり德川氏あるのみ。如何ぞ特筆せざる可けんや。

大正國語讀本（修正版）卷四　終

大正五年十二月廿二日訂正印刷
大正五年十二月廿五日訂正發行
大正七年九月廿六日修正印刷
大正七年九月三十日修正發行
大正七年十二月十二日修正再版印刷
大正七年十二月十五日修正再版發行

大正國語讀本修正版
全拾册

定價
卷一・二　各金三拾四錢
卷三・四　各金三拾一錢
自卷五至卷十　各金三拾錢

著作權所有

著作者　東京市麹町區土手三番町三十六番地　保科孝一
發行者　東京市牛込區白銀町貳拾番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　佐久間衡治
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市牛込區白銀町二十番地　振替口座（東京）七四二番　合資會社育英書院
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座（東京）二八〇九番　目黑書店